

▶地域の自慢  
ふるさと神輿



▼ふるさと会館で初めての新年を迎えました



▲東藤沢ふるさと夏祭り

それがきっかけでした。

「それと同じように東藤沢の子どもたちにも心に残るふるさとを伝えていきたい。行政の資金的な支援を受けずに、住民たちの力で何かできることはないか、それがきっかけでした。」

「私の故郷、新潟では毎年夏に地区のお祭りがあつて、夏が来るのをすごく楽しみにしていました。幼い頃のことですが、今でもあのにぎやかな光景と、わくわくするような太鼓や祭囃子の音が心に残っているんです。」

以前、東藤沢中央集会所の横に、神輿や子どもたちのハッピなどの保管場所として旧ふるさと会館がありました。しかし年数を経て老朽化してしまつたため、地域住民の手で建て直そうという話が持ち上がりました。

ちよつと1年前の3月、東藤沢ふるさと会館が竣工しました。その建設運動の中心となつたのが清水英男さん(77才)です。



■東藤沢ふるさと会館再建委員長 清水英男さん(東藤沢) 地域の絆と力でふるさとづくりを...

平成21年には、「ふるさと会館再建委員会」が設立され、設計、建設、資金調達、広報などの部会を設け、幾多の会合を重ねました。当初は協力してくれる人も少なく、あきらめが頭をよぎつたこともありましたが、

しかし、心に残るふるさとと情景が、清水さんを支え続けたそうです。「次代を担う子どもたちに、ふるさとの礎を残したい...」再建委員会の想いが通じて地域住民の温かい協力が得られ、ふるさと会館が完成に至つたのです。

迎えた落成式。自ら書いた看板を掲げた清水さんの胸をよぎるのは、生まれ故郷で耳にした太鼓や祭囃子の音でした。ふるさと夏祭りのシンボルである神輿と花車は、ふるさと会館の中で、19回を迎える今年の夏祭りでの出番を待っています。

住民の力で築いたこのふるさと会館、建設に協力された地域住民の皆さんの想いとともに、東藤沢の里で輝き続けることでしょう。



野鳥の姿を自然のまま正確に再現した、今にも飛び立つかの様な木製彫刻それがバードカービングです。「作品について、互いに批評しているときが楽しいですね。ここは良いとか、次はここを少し直してみようとか、みんなで学びあつて、今後に生かす、研究する楽しさを共有しています。」

「西武バードカービングクラブ」が発足したのは15年前。指導にあたる渡辺栄一さん(81才)は発足当初からのメンバーです。渡辺さんを含めた3人が80代、毎月第1・3火曜日の午前中、各々が製作途中の作品を持ち寄つて、西武公民館で勉強会を行っています。

「バードウォッチングの際に撮影した写真や図鑑などをと、四角い木片から鳥の形を切り出して、大きさはもちろん、羽の形や生え方で、実際の姿に忠実に彫っていきます。モデルとなる鳥の情報が豊かであればあるほど、作品に磨きがかかります。」

完成した作品は、野鳥展や自然展をはじめとした、市内の展覧会等に展示されます。作品を通じ野鳥や自然に触れ合うことが、自然保護に対する意識の向上のきっかけにもなっています。



■西武バードカービングクラブ指導者 渡辺栄一さん(81才) 野鳥の生きた姿に夢を馳せて...



▼学び、研究する楽しさを共有

▲物心旺盛! 7人のメンバー



「作っている過程で、愛情がどんどん湧いてくるんです。手の中の木片が鳥っぽくなっていくにつれ、不思議と本物の鳥を抱いているようなぬくもりを感じてくるんですよ」と笑います。

渡辺さんとメンバーの皆さんは、切磋琢磨しながら和気あいあいと、さらなる技術向上に励んでいます。

◎本紙「かがやく」編集委員大募集!

生活学習やまちづくり活動、編集活動に興味のある方、ボランティアとして活動していただける方ならどなたでもOK!  
年齢・経歴は問いません

- 活動日：原則週1回  
活動場所：市役所(会議)、市内(取材)  
活動内容：  
①取材対象の情報収集  
②取材及び企画編集作業  
③冊子の配布に関する作業  
④生活学習フェスティバルへの参加

◎いるま生活学習フェスティバル実行委員を募集します!

第18回いるま生活学習フェスティバルの実行委員を募集します。詳細については広報いるま4月15日号をご覧ください。

◎「いるま学びの場」生活学習サークル・教室情報募集!

「何か始めたいなあ」とお考えの方、「アレ習いたいけど、どこに行けばいいだろう」とお悩みの方。市では、公民館等の公共施設で活動しているサークルやお近くにある教室の情報を提供しています。そのために、以下に該当するサークル・教室情報を募集しています。

- ◆対象：★生活学習に関わっていること ★人間市内に活動場所があること  
★一般市民が参加できること ★年間を通じて継続的に活動していること  
★政治活動・宗教活動・悪質な高法等でないこと
- ※冊子発行は市教育委員会と人間市生活学習をすすめる市民の会で行っています。

こちらのコーナーに関するお問合せは生活学習課へお寄せ下さい。

- 興味が出たことは試ししてみよう、新しい好奇心を何かやろうという好奇心をなくさない、こういう生き方をしている人は、みんな元気です。(ST)
- 社会のモラルが開かれる。若者男女問わず、今一度再認識できたら、すばらしい世の中になると思います。(HT)
- 向学心に燃えている人は、いくつになっても元気!なんと言っても目がキラキラと輝いています。そのモチベーションを高めていくことは、とても楽しいことですね。(NT)
- 20日足らずの入院をした時、かがやく人と話した人、だるさ?白髪?と患に浮かんだのは、黒い髪と患者の面影を見る、白髪の天使たちでした。(MK)
- 今日も活き活き人間人に感謝し、その一端を紹介できる喜びに浸る。「目的・夢を持つことが如何に大切か改めて知った取材でもあった。(ST)
- 色々な方と出会い、おしやりをくれる、たくさんのお褒め状に、たぐりかきで、井戸敷会談もイイもんだなあ。(SM)

企画編集：「かがやく」編集委員会  
発行：人間市教育委員会生活学習課

お問い合わせ 人間市教育委員会生活学習課  
連絡先 〒358-8511 人間市豊岡1-16-1  
TEL 04-2984-1111(内線4127) FAX 04-2984-4841





■玉すだれ会 常松至さん(89歳)(扇町産) 伝えたい 江戸の大道芸

「さては南京玉すだれ、さては不思議な玉すだれ」調子のいい口上で開演です。集まった子どもたちは、何が始まるのかと、じつと見つめています。メンバーの息がびつたり合つて、四角い玉すだれが釣り竿、橋、帆へと、次々に形を変えていきます。続いては常松さんの見せ所。「5、4、3、2、1、0」子ども達のカウントダウンと共に、玉すだれのロケットが高く上がつていきました。

常松さんは10年前前に玉すだれを手に入れました。基本的な技は通信講座のビデオとテキストでマスターしたそうです。

「基本の動作ができるようになってくると、仲間と一緒にやってみたくて思い始めるものなんです。グループで演じてみたり、お互いに技を磨き合ったりしたいなあ、そんなことから、同好の士はいないものかと思つて探していた時に、東町公民館で活動する「玉すだれ会」の会員募集のチラシを見つけたんです。」



▲ほら、私にもできたよ  
▶しだれ朝にさも取たり

「さ」とも小学校の先生をしていた常松さんは、子どもたちの前で玉すだれをやるのが「一番楽しい」と話します。子どもたちにもわかりやすく、喜んでもらえる技はないか?そんな思いから、ロケットやブランコなどの新しい技を編み出しました。子どもたちの笑顔に囲まれた常松さんを、これからもあちこちで見かけることでしょう。



■造形作家 国府田勝さん(東金子) 作品を通して心の触れ合い

「作品は対話のきっかけ」 「退職して初めて自由に使える時間ができて、制作に没頭できる幸せを感じています。」

国府田勝さん(77才)が描く作品は、一般的な風景画などのような写実的な絵画とは異なります。「幼いころ目にした空襲の情景や、戦後の激動する時代背景が影響していますね。そう話すように、近年は葛藤する心、社会の苦悩、人間のはかなさなどをモチーフにして制作にあたっています。」

「心を育む」 国府田さんは、今は亡きお母様の介護をしていた時に、自分の時間や作品を誰かのために役立てたいと強く感じました。そんな想いからボランティア活動として、生活支援センター



▲「浮遊するたましい」



▶キッズアートギャラリーにて

での創作教室や中央公民館の「アート事業」キッズアートギャラリー」に携わっています。

毎年夏、アットを会場に開催されるキッズアートギャラリーでは、高校生までの子どもたちの作品展示と、制作ワークショップを行っています。様々な美術体験や、それを通じた交流の機会を広げ、生き生きとした感性を大切にしています。

「大人が考えつかないような、子どもたちの豊かで独創的な発想力にパワーをもらっています。将来彼らに芸術を理解する心が育つてくれれば最高なんですけどね」と語る国府田さんは、今日も未知の可能性を追い求めています。



■書画の朱に魅せられて... 久留忠津子さん(東藤沢) 篆刻!それは芸術の世界です

久保稲荷公民館の教室から、石を刻る音が聞こえてきます。今日は市内で唯一の篆刻サークル「人間篆刻クラブ」の活動日です。皆さん和気あいあい、楽しそうに活動しています。その中の一人、久留忠津子さん(64才)は元々字を書くことが好きでした。消しゴムを彫って賀状印を作ったのがきっかけで、自分の書にオリジナルの落款を捺したいと思ひ篆刻を始めたそうです。

篆刻は、石に印刀で文字や図象を刻り、印影をとって楽しむもの。一見小さな印の世界ですが、その中には大きな楽しさが隠れているそうです。

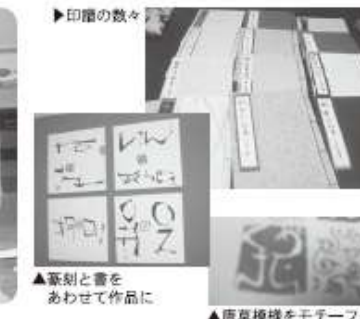
17年が経った現在、久留さんの作品はかなりの数になります。その印影をまとめて印譜にしたり、書と合わせたりして楽しんでいきます。

「余白と文字とのバランスを考えながらデッサンから始めて、時間はかかりますが、思った通りの印影がとれます。それは、それまでの苦勞も忘れてしまいましたね」と話します。どこまでも美しさを追求する、篆刻の奥深さを感じました。

久留さんの作品には、アルファベットや唐草模様などのモチーフを取り



▲集中して刻っています



▶印譜の数々  
▲篆刻と書をあわせて作品に  
▲唐草模様をモチーフに

入れたものもあります。伝統と新しい感覚が見事に融合されています。「石と向き合っている時、不思議と心安らぐ気がするんです。それと年1回の展示会への出品が、刻る情熱を与え続けてくれてる気がします。これからも、先生や仲間の皆さんに支えられながら、色々な発想を大切に刻り続けていきます」と話す久留さんでした。



■宅手アコーディオンサークル指導 中山(本名)大田英雄さん(東寺) 夢の実現に向けてアコーディオンのイメージチェンジ

「どこどなく哀愁を誘う音色、それも身体の中から奏でられるような、他の楽器では得られない体感が味わえます。とてもいいですよ!!」と、笑顔でアコーディオンの魅力について話す中山英雄さん(77歳)。

アコーディオンとの出会いは60年前、ロシア民謡の合唱団白樺に入団した時でした。「あつた楽器の中からたまたま選んだだけなんです。それ以来半世紀以上が経つんですね」と言います。

「日本でアコーディオンといえば、いまだに伴奏楽器として見られることが多いんです。それを本場ヨーロッパのように、独奏楽器としても受け入れられるようにするのが夢なんです」と語る口調は静かですが、熱いものを感じました。

中山さんのお話を聞き、プロアコーディオン奏者のcoba(コバ)さんも同様の話をしていたことを思い出しました。プロの奏者も含め想いは共通したものでしょう。

現在中山さんは「宮寺アコーディオンサークル」の指導にあたり、いま「個々の奏者がどうやって意思を通い合わせるか、またその中でどうや

つて個々の魅力を引き出すかに重きを置いていきます。それを学ぶ機会として、独奏や伴奏だけでなく、アコーディオンの合奏を多く取り入れるようにしています。」

また、気楽な雰囲気の中でアコーディオンを堪能してもらおうと、お嬢様でプロアコーディオン奏者の大田智美さんとその友人による「アコーディオン&ピアノコンサート」を二本木公民館と共に企画運営しました。今年5月にはアミーゴでのコンサートも予定しています。

中山さんの、アコーディオンに懸ける思いはたゆみなく続きます。今日も夢に向けて一歩一歩前進しています。



▶アコーディオンの魅力を!  
▲うまくできたかな